

## 夏に向かう日々2

校長便りも、あと残すところ175本です。計算したところ、2年間で450本が可能です。50本臨時号がすでに出ていますので、500本以上は書けることになります。2年間で500かけるのだから、1000の校長便りが届けることができる4年間ぐらい勤めてみたいというのが本音です。4年の夢がかなったら、これからの10年の種まきができるでしょう。確固とした磐城高校を形作ることができると思います。

しかし、今年度限りで校長の勤めを終えることが確定している以上、次の方にそのことを伝え、きちんとバトンを渡していきます。

校長を退職しても同窓生であることは一生続くので、陰からこの学校を支えていきたいと思います。

国語科教員としての磐城高校はとても魅力です。先人が残した845本の過去問研究を管理しながら、新しき過去問研究と各模擬試験の対策と生徒一人一人の得点能力の向上を図る毎日は、私にとって大きな魅力です。特に現代文の考え方を育てることは、近代という時代考察とポストモダニズムの分析と構造主義における言語処理能力とを兼ね備えた能力育成と同義ですから、こんなに楽しいことはありません。

また、「十八史略」を一緒に読んだり、「伊勢物語」「更級日記」などを読み進めつつ藤原氏の栄華と栄枯盛衰を「平家物語」とともに読み比べるなど、この上ない喜びの時間でありましょう。

夏目漱石と近代も大きなテーマです。一度はきちんと読まなければならないと思って買ってあった全集を順序良くわが身のものにしなければなりません。夏目漱石のほかには谷崎潤一郎と芥川龍之介と辻邦生と森有正と高橋和巳の全集が私を待ち受けています。

また、村上春樹が、アメリカのプリンストン大学で行った「第三の新人」と呼ばれる戦後の小説家たちの小説を読み進めた試みは、とても心躍るものでした。特に、丸谷才一の「樹影譚」の読みはとても心に深く残るものだったので、「若い読者のための短編小説案内」村上春樹著に詳しく掲載されている)もう一度、村上春樹全体を読まなければなりません。(実は村上春樹のすべての著作と研究書と文芸書を1979年から収集しています。)

こうしてみると、退職しても、50年ぐらいは必要ですね。時にはゴルフもやらなければならないし、魚釣りもやり、畑も耕し、草刈りもしなければならないことを考えると、来年からも忙しくなりそうです。